

## 「死と復活の予告」

2014年09月27日

マルコによる福音書9章30節～32節。一行はそこを去って、ガリラヤを通過して行った。しかし、イエスは人に気づかれるのを好まなかった。それは弟子たちに、「人の子は、人々の手に引き渡され、殺される。殺されて三日の後に復活する」と言っておられたからである。弟子たちはこの言葉が分からなかったが、怖くて尋ねられなかった。

フィリポ・カイサリアに続き、エルサレムへの途上のガリラヤで、主イエスは、死と復活について二度目の予告をされた。エルサレム神殿の権威ある宗教家たちに排斥されて殺され、三日目に復活すると予告されたが、弟子たちには理解できることではなかった。当然であろう。ガリラヤを通過して行く途中、主イエスは人目を避けたかった。ガリラヤの民衆は励ましの満ちた言葉と力あるいやしを求めた。しかし、その「ガリラヤの春」は終わり、十字架の死を決意してエルサレムに向かっている。民衆の求めには応じられない時が来ていた。「人に気づかれるのを好まなかった」と記している。

弟子たちは、主イエスの死と復活の予告の言葉を理解することはできなかったが、とげが心の中に突き刺さったように残っていた。しかし、そのことについて尋ねることは、怖くてできなかった。

十字架刑はローマ帝国に反逆した者に科せられる残酷な刑で、ユダヤではしばしば執行されていた。主イエスは、この十字架刑で殺された。ユダヤ人にとって十字架刑は呪われた者の姿である。弟子たちは主イエスに命を賭して従うと言っていたが、エルサレム神殿の護衛兵に主イエスが捕縛された時、一目散に逃げ去った。また、大祭司の庭で尋問を受けていた時、ペトロは三度も、主イエスを知らないと否認した。彼らは深い恥辱と挫折の中で、主イエスの十字架を遠くから見ていた。

ところが、死んだ主イエスは復活し、生きていることを体験した。その時彼らは、裏切りが赦されている事実を、大きな喜びの中で知らされた。また、死を突き抜けた神の命を受け止めた。十字架は赦しの出来事であり、復活は神の永遠の命の啓示であると信じたのである。その信仰がキリスト教という宗教を生み出した。十字架と復活に「福音」を見出したからである。彼らは身をもって体験した喜びを「福音」として宣教した。

代々の教会は、弟子たちが喜びをもって宣教した「福音」を、自らの「救い」として受け止めてきた。しかし、ここには、大きな躓きがある。十字架は力とは反対で、無力な敗北者の姿である。パウロはコリントの信徒への手紙一1章18節で「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です」と書いている。十字架は、しるしを求める者には躓きであり、知恵を探す者には愚かである。また、死人の復活など、あり得ない。十字架による赦し、復活による神の命の啓示は理性的に承服できることではない。しかし、教会は「十字架と復活」に救いを確信し、その信仰に立ち続けてきた。それは、聖書を書いた弟子たちの証言の真実から承服させられ、また「聖霊」によって「アーメン」と唱和することができるからである。

私は「十字架と復活」に罪の赦し「生の是認宣言」を聞き、移ろいいく時間の中にあって、神と結び合されている確かを信じてきた。躓き、愚かと言われようとも、私の「救い」であると全身を込めて告白したい。